



日本キリスト教団
三軒茶屋教会
<http://sanchurch.jp/>

三軒茶屋 教会通り

〒154-0024
第46号 2013年4月発行 東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5
TEL/FAX: 03-3418-4933
発行：三軒茶屋教会 広報部

「ボランティア」という言葉が日本で市民権を得たのは、1995年に起こった阪神淡路大震災での一般市民による援助活動がきっかけであった。

当時「何もしないでただ見ていられるわけにはいかない」と、多くの人々が、できることはないかと被災地に入っていった。

「ボランティア」は英語から片仮名そのまま日本語となった。しかし、不思議なことに未だに日本語そのものにはなっていない。日本語にはなりにくい何かがあるのだから。

日本においてボランティアという言葉にはいろいろな響きがある。見返りを求めない無償性、他人達を利する他利性、自分の意志で参加する自主性などである。以前は、物好きや篤志家といった響きもあった。つまり、日本で言うボランティアは、言葉の上でも多様な側面をもつ多面体であって、その内容は一語では表現しにくいのだ。

ボランティアの語源は、ラテン語のボランティアール「意志のある者」である。歴史的には、ヨーロッパ中に世に発達した騎士団へ入団する志を表明した者をさしていた。それが後

世になって志願兵や義勇兵を意味する言葉となった。

語源からみると、ボランティアとは、掲げられている実現目標を、自分の命を犠牲にしても、成就するよう願いつつ行動する人々、という意味になる。

キリスト教会は、長い歴史の中で、多くのボランティアたちを生み出してきた歴史を持つ。

産業革命による近代化がもたらした社会のひずみの中で生きる人々へ手を差し伸べるボランティア。イギ

ボランティア 日本語になる日へ

牧師 伊藤英志

リスから始まった日曜学校などがよい例だ。幕末から明治期以降に日本にやってきた宣教師たちも、語源を引き継ぐボランティアたちだ。

教会が送り出してきたボランティアたちは皆、十字架に至るキリストがたどった道を知っている。主キリストは、自分の命を差し出してまでも天の父の御心が成就するよう願って行動した。つまり、ボランティアの本来の姿は、「キリストに倣おうとする意志を持つ者」なのだ。

「キリストは...自分を無にして、

僕の身分になり...へりくだって死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした(フィリピ2章6節以下)」。ボランティアの根柢は、この聖書の御言葉に由来するといつてよい。

ボランティアという語が片仮名のままなのは、主キリストの御業がまだ広く受け入れられていないからに他ならない。ボランティアが、博愛や人道、善意や善行の意味に留まり続けるのであれば、結局は自己満足や狭い意味での自己実現といった理解から飛躍できないままだろう。



しかし、希望はある。ボランティアとは、その精神性や行動力に

おいて、時代を問わず、常に先進性を帯びているからだ。ボランティアが受け入れられていく社会は、いざれ主キリストを見出す社会へと変えられていく。よりよい社会へと向かうその変化の先頭には主キリストがおられるからだ。

現代のボランティアたちが切り拓いていく出来事は、神による創造の御業に参与するのと重なっていく。ボランティアが日本語になる日、わたしたちは主の御心をそこに見るだろう。